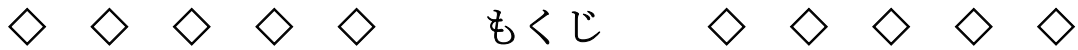


あまぬま ごじゅう

天沼郷中ハンドブック



杉並区立天沼中学校



第1章	中学校版縦割り班活動～天沼郷中の誕生	3
1	地域の子ども社会が変わった～異年齢集団の消滅	3
2	天沼郷中（あまぬまごじゅう）の由来	3
3	天沼郷中のねらい	5
4	生徒が行き詰らない学校～校内の多元的所属	6
第2章	天沼郷中の進め方	7
1	リーダー体験	7
2	グループサイズ	7
3	エンカウンターを生かした人間関係作り	8
第3章	天沼郷中の実践編	9
1	天沼郷中の場面	9
2	生徒総会～議案書読み合わせ～	9
3	運動会～応援団	10
4	綱引き～協同競技	11
5	道徳～シェアリング	11
6	教科～教え合い活動	12
7	合唱君クール～歌練習	13
8	給食～食育	13
第4章	天沼郷中の課題と今後	14
1	天沼郷中の課題	14
2	天沼郷中の今後の展望	15
	おわりに	15

第一章 中学校版縦割り班活動～天沼郷中の誕生

あまぬまごじゅう

1. 地域の子ども社会が変わった～異年齢集団の消滅

時間・空間・仲間があった時代

テレビアニメ「ドラえもん」で、主人公ののび太やジャイアンたちが遊ぶ広場は、公園ではありません。おそらく私有の空き地で、いずれ建築物がたつのでしょう、広場の片隅には必ず土管が積まれています。そういう空き地が、かつてはいたるところにありました。そういう空き地で、かつての子供たち（たとえば私は昭和31年生）は遊んでいました。子どもたちが遊ぶ空き地は、「原っぱ」とか「路地裏」と呼ばれる比較的自由に出入りすることが可能な「空間」だったのです。

その原っぱに家やビルが建ち、空地への侵入も厳しく取り締まられるようになりました。子どもたちが止むを得ず、スーパーマーケットの駐車場でボールを蹴って遊んでいると、たちまちお店から学校に苦情電話が入ります。

遊ぶ場所が無くなっただけではありません。学習塾、英会話、ピアノ、スイミング……塾や習い事の産業は、子どもたちが放課後や休日を過ごすメインの場所になり、遊ぶ「時間」がなくなりました。行かなくてはならない塾がない子どもは、遊ぶ「仲間」がいないために、結局家の中でゲーム遊びをして過ごします。

「遊ぶ時間」「遊ぶ空間」「遊ぶ仲間」の「3間」のことを、集団遊びが成立するための三条件と呼びます。現代の子ども社会から、そのいずれもが姿を消しました。

地域の異年齢集団の役割

地域の異年齢集団は、ガキ大将に率いられた近所のグループです。当時の子どもたちは、地域における異年齢集団と、学校における同年齢集団の両方に所属し、それぞれの集団の特質に合った過ごし方の中から多くのことを学び、社会性を身につけて成長することができていたのです。

地域の異年齢集団における「ガキ大将」は、いじめっ子などではなく、小さな子どもたちにも目を配り、自治的なルールの上に、強くを挫き、弱気を助けるリーダーでした。小さい子どもは『みそっかす』と呼ばれましたが、彼らのためのローカルルールが用意されていて、そのおかげで仲間はずれもありませんでした。たとえば、三角ベースと呼ばれた野球もどきの遊びでは、みそっかすは何回空振りしてもアウトにならず、ボールが当たるまでバットを振ってよかった、というように。

ところで、「ドラえもん」は昭和50年前後の子ども社会を映していますが、遊びは同じ学年に限られています。すでにこのころから、地域の遊び集団は変質していったのかも知れません。

学校の異年齢集団＝「縦割り班」の登場

ガキ大将に率いられた自然発生的な異年齢集団が徐々に姿を消していくのとは逆に、文部科学省は通知「児童愛護班結成活動に関する通知」（昭21）を出しましたが、これが全国に「子ども会」が結成される大きな役割を果たしたようです。やがて、「全国子ども会連合会」が結成されるにいたりしました。ただし、役所主導でつくられた子ども会は、年間を

通した日常的な「遊ぶ空間」とはなりえませんでした。

地域の異年齢集団に対し、学校は「学級」と言う同年齢の横割り集団にすることで、効率よく教育することが目的です。しかし、地域における異年齢集団が消滅した結果、その機能を補うものとして、小学校に縦割り班活動が多く生まれてきました。

文部科学省や教育学者が旗を振って生まれたものではなく、現場の教員たちが必要性を感じて縦割り班活動は生まれ、全国の小学校に広まった学校文化であったようです。

2 天沼郷中（ごじゅう）の由来

本校の天沼郷中は、中学校版の縦割り班活動につけた名称です。本校では、新入生の入学直後に行っているフレンドシップスクールで、構成的グループエンカウンターを使った集中講座を行う中で、ルールに従った班討議にたくさんの時間を割いています。その討議を通して、ルールを守ることで良い討議ができたのだという経験をしています。

中学校生活のスタートで得た良い経験を、三年間にわたって続け、さらに深い学びに至ることをねらいとして、3学年合同の班編成を考えたのです。

アクティブラーニング型授業は、①主体的に、②対話的に、③深い学びを得ることを目的にした授業形態ですが、エンカウターの班討議はまさしくこの構造を使った授業です。この形式の授業形態を、異年齢で実施する可能性を検討していたときに見つけたのが、薩摩の郷中教育でした。日本の伝統的な学びの形の中にその手本を探すことから、郷中教育の発見がありました。

そもそも郷中教育とは何かから、話を始めましょう。郷中とは、江戸時代の薩摩藩・鹿児島城下に30ほどあった、藩士の子どもたちによる自治的な教育組織でした。藩校や寺子屋のように師匠について学ぶのではなく、先輩から後輩へ、そして同輩同士が切磋琢磨する集団です。年齢により「稚児（ちご）」と「二才（にせ）」に分けて、勉学・武芸・スポーツを通して、先輩である二才が後輩である稚児にたいして指導する形式でした。

郷中教育で多くの人材を輩出した秘訣は、三つあると思われます。一つは、先生や大人がいない自治的な集団であるため、これを維持するためにシンプルなルール（掟）を徹底したことです。「嘘をつくな」「弱い者いじめをするな」「卑怯なふるまいをするな」「何事もよく相談して決めろ」などの掟が、多くの郷中に共通していました。

二つ目は、この仲間集団の中で、武芸がだめなら学問で身を立てるという具合に、お互いに多様性を認めていたこともすごいことだと思います。たとえば、西郷隆盛は少年時代にケンカの仲裁をした時に右肘を負傷したため、やむなく武芸ではなく学問に力を入れ

しもかじやちよう

下加治屋町の郷中

鹿児島城下に30あると言われた郷中の中で、最も有名なものは、わずか70戸ほどからなる下加治屋町のものです。幕末にこの郷中から羽ばたいた人物は、西郷隆盛、大久保利通、吉井友実、村田新八、大山巖、西郷従道、東郷平八郎、山本権兵衛…。幕末から明治初年にかけて活躍した薩摩藩出身の政治家、軍人たちです。たとえば、西郷と大久保は「明治維新の三傑」のうちの二人、東郷は日露戦争の連合艦隊司令長官で海外でも有名ですし、最後にあげた山本は第16・22代の総理大臣です。

たのだそうです。尚武の薩摩で武芸がだめでも卓抜したリーダーシップを発揮することができたのは、郷中によって練られた人間性だったのではないのでしょうか。

三つ目は、「詮議」と呼ばれる徹底的な議論の場です。二才と稚児が腹を割って徹底的に議論し合うことです。二才から稚児に「志とは何か」と問が出され、「国家に対する丹誠である」と応えると、今度は「丹誠とはなにか」と問われる。

また、架空の状況を設定し、それに対する解決策を考えるなどの思考訓練を時間をかけて繰り返しやっていたようです。これなどは、構成的グループエンカウターのエクササイズで、入学直後に全生徒が体験するエクササイズ、「無人島SOS」と同じです。そして、それは PISA でいう社会的キーコンピテンシーの協働的問題解決能力の育成にあたります。郷中教育では、ときには、お互いの短所を遠慮なく指摘し合うなど、感情も鍛錬したそうです。その付き合いを経て、お互い心底信頼し合うような人間関係をつくっていったのだと思います。

さて、今の学習指導要領では、言語活動の充実を通して「思考力・判断力・表現力等」を育成することを目指していますが、いまだ不十分なため新指導要領でアクティブ・ラーニング（AL）型授業が登場するのだと言われます。ところが、100年以上前の日本に、すでに高度なモデルがあったのです。本校の今後の教育活動に生かしていきたいと思えます。

薩摩と会津、そしてイギリス・ロンドン

郷中のような組織は、当時の日本のいたる所にあったようです。その中で、最も郷中に似ていたと言われるのが、会津藩の什（じゅう）です。本校の『言霊百選』に什の掟を載せていますが、その中に「嘘を言ふことはなりませぬ」「弱いものをいぢめてはなりませぬ」があります。幕末から維新にかけて最も激しく争った二つの藩に大きな共通点があったことに、むしろ歴史の必然を感じます。薩摩の郷中と会津の什のオマージュとして「天沼郷中」と名付けました。

ところで、ロンドンの学校を訪問した折に、現在も中学校の「ハウスシステム」があることを知りました。そこでは縦割りのハウス中で先輩と後輩が教え教えられ、協力して何かに取り組む。また、他のハウスと競うこともあるようです。ハウスシステムは、郷中や什と同じく、異年齢集団です。洋の東西を問わず、似たような教育システムが、子どもたちの成長に大きな役割を果たしていたようです。

3 天沼郷中のねらい

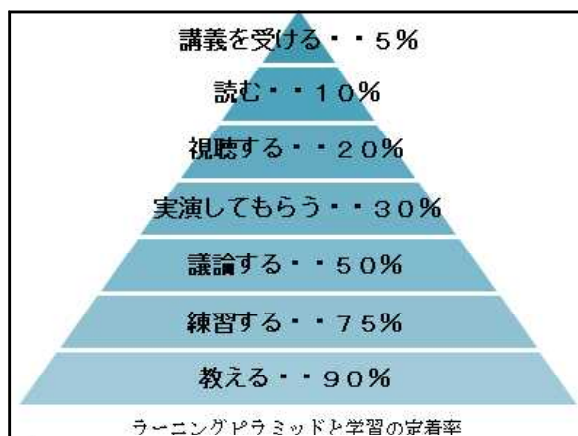
「天中式AL（アクティブラーニング）型授業」を試行しているねらいの一つは、教科授業におけるマルチエイジ編成です。つまり、先輩がリトルティーチャーとして、後輩たちに教える授業です。自分が悩んだ、つまづいた経験を生かしながら教えることができると、先生から教わるのとはまた違った効果があります。

右ページの図は、アメリカの国立訓練研究所の学習定着率に関する研究をまとめた「ラーニング・ピラミッド」です。これを見ると一方通行の講義で生徒の記憶に残るのはたった5%です。主体的に学習に関わる度合いが高まるほど効果はアップし、最高が「他人に教えた時（90%）」だということです。

生徒が生徒を教えるという形式の授業はかなり実験的な取組になりますが、たとえばオランダの「イエナプラン」は、マルチエイジの学級集団が特色の一つになっています。

実技教科や、少人数・習熟度別編成を行っている数学、英語の教科なら、実施可能です。縦割りの郷中授業をイベント的に試行し、最後はその成果を日常の教科授業に活かす。理想は、生徒の得意不得意によって、教える生徒が入れ替わり立ち替わり変わることです。

そのためには、今後、「学びの個別化」に対応できるICTの充実、たとえば一人一台のタブレットの配布が進むことが不可欠になります。



4 生徒が行き詰らない学校づくり～校内の多元的所属

日本の学校の特色の一つは、学級内の濃密な人間関係の形成にあります。同年齢集団である「学級」は、横割りの「共同性」を大切にします。学習する集団であるだけでなく、運動会などの大きなイベントを共通体験し、伝統文化に触れたり、マナー礼儀を身につけたり、食事と共にするなど、まさに運命共同体とさえ言えるような共同体感覚を持つことが前提になっています。

そして、その濃密な人間関係（＝同調圧力が強い）の共同体の中で、いじめが発生しています。特に、欧米に比べて日本のいじめは、親しい友人・自分の学期の中で生じることが多いようです（『いじめの国際比較調査』森田洋司）。何でも一緒に行動する同調圧力に、どうしてもなじめない生徒が登校を渋るようになります。学校生活のほとんどを過ごす学級集団が、自分にとって居心地の悪いものになってしまったら、学校そのものが居心地悪くなるのが、現在の日本の学校です。

これを解決する方法の一つが、多元的所属を可能にしてあげることだと、社会学者の宮台真司は言っています。部活動や委員会などは、従来の縦割り班活動の一つの形です。これに加えてお互いの存在を認め合い、大切にすることを第一義にする天沼郷中のような異年齢集団がしっかりと根付いたら、学級集団不適応が、即不登校にならずに済むはずです。

学級の友だち関係に行き詰っても、郷中の先輩が気持ちを聞いてくれる、励ましてくれる、今後についてアドバイスしてくれる、もしかしたら直接関係修復に力を貸してくれるかもしれない。天沼郷中が、そんな副次的集団としての力が付いたらいいと考えています。

第二章 天沼郷中の進め方

1 リーダー体験

(1) セミインフォーマルグループ天沼郷中の意義

かつての日本にあった村落共同体、あるいは昭和時代までの都市や都市近郊では、ガキ大将をリーダーとする異年齢集団が存在しました。そこで、子どもたちはルールを守り、仲良く遊ぶことを身につけていきました。子ども間のトラブルがあっても、ひどいいじめに発展しないような抑止力も働いていたのです。

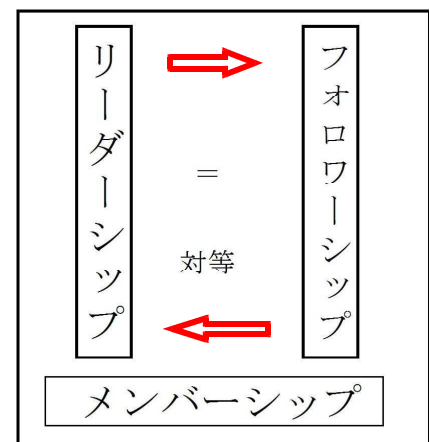
このような異年齢集団が姿を消してしまった現代社会において、学校内の同年齢のフォーマルグループ（学級）とインフォーマルグループ（仲良し同士）の他に、異年齢のセミフォーマルグループの存在価値はいよいよ高まっているのだと考えます。その結果が、小学校における縦割り班活動の活発な実践なのではないでしょうか。

(2) リーダーとフォロワーのローテーション

児童たちがこの異年齢集団の中で成長する理由は、集団の中における役割の機能があります。そもそも集団には、まず集団への所属感＝メンバーシップのもとに、リーダーシップとフォロワーシップがあります。居心地のよい安心できる集団へのメンバーシップが基本にあり、その上に先頭に立ってグループを引っ張るリーダーシップがあり、それを徹底的に支えるフォロワーシップがあります。

この3機能がバランスよく保たれてはじめて、チームは目標を達成できる強い集団になります。強い集団の一員として役割をしっかりと果たすことになり、そこに属する個々の成長も達成されます。

このリーダーシップとフォロワーシップは、場面場面でメンバーが交互に交替して経験できると良いのですが、同年齢集団で全てのメンバーがリーダーを勤めるようなローテーションを組むのはなかなか難しいです。



(3) 郷中によるリーダーのローテーション

そこで、異年齢集団、縦割り班の登場です。同年齢集団では、終始陰に隠れがちな児童生徒も、少人数の縦割り班では、当然のごとくリーダーにならざるを得ないからです。上級生であれば、腕っ節が強くなくても、強引さは無くても、知識と経験をもとにした面倒見の良さでリーダーシップは発揮できます。

小学校における縦割り班活動は、6年生が1年生の面倒をみるという形式や、6－3年生、5－2年生、4－1年生の2学年の組み合わせで行われることが多いようです。

中学校では、従来小学校の縦割り班に当るものとして、生徒会活動や部活動が異年齢集団とされてきました。しかし、委員会や部活動のチームが、同学年単位でチーム編成されて活動をする、縦割り班活動の面は消えてしまいます。

そこで考えたのが、生徒会活動に留まらず、学校行事や、道徳、総合的な学習の時間を舞台にした天沼郷中でした。

2 グループサイズ

どのようなグループサイズが、縦割り班活動として有効になるのか、大グループ、中グループ、小グループの三段階に分けて考えてみたいと思います。

(1) 大グループ

まず、学級単位で縦割り集団を作る大グループは、運動会や合唱コンクール等の学校行事で、チーム対抗で競うような場面で結成します。本校を例にすると、赤団（A組連合）、青団（B組連合）、黄団（C組連合）の3軍が年度当初に結成され、たとえば運動会の生徒会種目の大綱引きは、男女ごとの縦割りのチームで対抗戦をします。また、整美点検週間など得点や、読書週間の冊数なども、縦割りで得点を集計しています。

他チームと勝敗を競うことにより、チーム内の結束を深める場面です。

(2) 中グループ

団の各学級から選抜されたメンバーで結成される郷中グループです。たとえば、運動会の応援団がこれに当たります。結団式で団長、副団長を決め、彼らを中心に演技構成を相談、練習し、本番を迎えます。短期集中的な練習期間は、学年の壁を超え、団の一体感をつくります。

結団式ではいきなり相談するまえに、お互いを知り合うためのミニエクササイズをすると効果的です。

(3) 小グループ

本校独自の郷中グループの中でも一番特色あるのが、小グループの郷中です。

1年生、2年生、3年生がそれぞれ2名ずつで6人一班を組むのが基本型です。同学年の仲間が最低でも一人いると、安心です。特に、この中でリーダー役になる3年生はお互いを頼りにし、支え合いながら下級生の活動をフォローすると相互の信頼感は深まります。

佐藤学先生の「学びの共同体」の実践では、4人グループが最適であるとしています。その理由は、4人いたほうがメンバーそれぞれに気づいたこと・考えたことが交流して広がりを得られる。しかし、5人、6人になると、お互いに依存心が生じ、発言や活動に偏りが出やすい、というものです。

しかし、異年齢の集団であれば二人で一組が合体した6人グループなので、気づいたこと・考えたことの広がりにはさらに広がり、他のメンバーに依存して黙っている心配は少ないことになります。そして、人間関係を深めるエンカウターの実施により、4人の限界が6人に広がると本校では考えています。

3 エンカウターを生かした関係づくり

郷中グループは日常的な集団ではないので、いかに気安い仲間になるかが活動のポイントです。本校では、「杉並フレンドシッププログラム」に基づき、構成的グループエンカウターを年間を通して学級で行う地盤があります。これを生かして、年度当初郷中グループの結成したときに、エンカウターのエクササイズを実施すると、異年齢でも一気に親しみを感じる集団になります。

本校の郷中活動の特色になっているのは、リーダー役を最高学年の3年生が務めることです。まず、気安い雰囲気づくりから、3年生が率先して行うのです。人間性が前面に出た、優しいリーダーシップを示すのには、エンカウターのリーダー役は最適の効果を見せます。

そして、この少人数の班活動は、第三章で述べる様々な場面を通して、できるだけ同じメンバーを固定にして活動を重ねていくのが、郷中活動成功のコツです。

第三章 天沼郷中の実践

1 天沼郷中の場面

(1) 特別活動

天沼郷中の活動場面は、大きく分けて3つの場面があります。一つは特別活動です。その中でも特に大きな成果を実感したのが、運動会（学校行事）でした。運動会で応援団が大きな存在感を示すのは、伝統的な中学校の文化と言えます。縦割りの応援団結団式で、構成的グループエンカウターの関係作りを目指したエクササイズの導入が大きな一歩となりました。

異年齢で活動することの新鮮さと楽しみを実感した生徒たちは、合唱コンクールの縦割りのボディパーカッションにも初めからポジティブに取り組みました。生徒会総会の議案書討議は、小集団になるので緊張感が出ますが、上級生がフレンドリーに下級生をリードすることで、班討議は新鮮味を持って活気づきます。

(2) 道徳

特別活動であげた成果を広げたのが道徳でした。24の価値項目を窓口に道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などを養うのは、全学年共通です。発達段階を考慮しつつ、同じ項目を異年齢の縦割り班で向き合う可能性を追求しています。

コツは、まず最初に、上級生が下級生の心情、考えを引き出すことです。しかし、必ずしも上級生が思考・感情レベルで常に先行しているとは限らず、下級生の経験や真剣さに上級生が刺激を受けることも多くあります。異年齢で、道徳性を養った上で、特別活動の分野で共同で取り組む展開もごく自然にできるようになります。

年度の初めは、体育館で班編成をしSGEを行って関係作りをします。初めは体育館の中で54チーム（6班×9学級）に分かれた集団討議を行い、全体で進行をします。進行を担当する教員も複数でチームを組んで行います。

年度途中からは、教室に戻ってクラス単位の縦割り班討議を行っています。テーマによっては、地域の大人に入っていて、幅の広い異年齢集団をつくって実施することもあります。

(3) 教科

本校では、放課後勉強会で「生徒ティーチャー」が得意な教科を友だちに教えるという活動をしています。また、「言霊百選」の名人検定を合格した3年生の名人が、1、2年生の暗唱を検定するという活動も行っています。これを一歩進めたのが、教科における郷中で、3年生が1年生の数学、英語、国語のリトルティーチャーになっています。同学年の「生徒ティーチャー」体験では、間違いなく教える生徒自身が学びの定着、深化に役立つという感想を得ています。下級生に教える場合の、自分の学びの効果を確認すること、教育課程上の位置付けは今後の研究の課題です。

2 生徒総会 ～議案書読み合わせ～

これまで各クラス内で行ってきた生徒総会の議案書読み合わせを、郷中で行ったらどうかと生徒が意見を出してきました。1年生はそもそも委員会の内容について全く分かりません。進め方もどのようにしていいか分からず、どうしても教師主導になります。それならば、内容をより知っている上級生が進行役を行い、下級生から出された質問に答えながら、要望等を吸い

上げればよいのではないかと生徒自身が考えたのです。懸念される課題を生徒と教員で事前に考え、行うことになりました。

前期の取り組みでは、各学級に配属された生徒会役員や3年学級委員による司会進行で行い、エンカウンターで班の雰囲気を和ませ、趣旨の説明、学級全体での議案書読みと進ませ各班での質問意見の検討することになりました。3年生が話し合いをリードし、下級生の意見を引き出しながらも、自身の経験をもとに質問に答え、議論をより深めることができました。

後期は総会へ向けた活発な意見交換だけでなく、3年生から2年生へ世代交代に向けた取り組みの第一歩となりました。今回の司会は2年生が務め、郷中および生徒会活動の運営を2年生が引き継ぐ意識付けとなると同時に、2年生にとって大きな自信につながりました。



3 運動会 ～応援団～

本校の運動会は、進学・進級して間もない春先に実施される大きな全校行事です。今年度も5月23日の運動会当日に向けて、生徒会役員や運動会実行委員の生徒を中心に、グループエンカウンターの手法を用いて応援団の結団をしました。団を応援しよう、他学年を応援しようという、学校全体で運動会を成功させようとする活動が、生徒の力によって行われました。

郷中活動を行ってきて、これまでと大きく変化した点が2つあります。まず、応援団の盛り上がりです。次に他学年の学年種目の際に生徒席にいる生徒が自発的に声を掛け合い、懸命に椅子の上に立って先輩を応援している姿です。

運動会後に実施した全校生徒向けのアンケートでは、「運動会で1番心に残っているものは何か？」の項目に、あるクラスでは「応援」と答えた割合が70%を超えました。また、「運動会では他の人と協力し、連帯感を深めることができましたか？」という項目には、肯定的回答をした割合は全校生徒の約97%という結果だったのです。



4 綱引き ～協同競技～

本校生徒の体力は、東京都や杉並区の体力調査の結果と比べて、低い傾向にあります。その改善策の1つとして、1学期期末考査後の学活の時間に郷中綱引きを行ないました。男女別3人を1チームとして、各クラスから2チームを選出し、それを郷中で組み合わせます。つまり、1チームには各学年3人ずつの9人が入る、郷中チームです。トーナメントを作成し、各チームにいる3年生のキャプテンがくじを引き、トーナメントの位置を決めます。

初戦から同じ色団同士が戦うこともあり、普段だとあまり見られない光景を見て生徒同士も楽しんでいました。審判は教員と生徒会役員が行いました。生徒は、運動会の生徒会種目綱引きでも行っていたのでとても慣れた様子でした。

最後にスペシャルマッチとして、優勝チーム対教職員チームの対戦も行われ、生徒は期末考査の疲れも忘れ、真剣に楽しんで行うことができました。



5 道徳 ～シェアリング～

郷中活動の中で、1つのテーマについて上級生と下級生が議論を行う。これを道徳の授業でも展開しました。先輩は後輩をリードし意見を出しやすくさせ、後輩は自分の意見をしっかりと言う。全員がそれぞれの意見を大切にしながら考えを深めていくことができます。これは、全校生徒が1年生の初めに、フレンドシップ教室で話し合い活動を経験していることで、話し合いのルールがそれぞれの中にしっかりと根付いていることが成功の大きな要因です。

今回のテーマは、「人権」。

話し合いは、法務省の人権作文の最優秀賞の動画を視聴し、思ったこと・感じたことや、これからの生活で一步を踏み出そうと思うことなどについて話し合いました。当日のワークシートの中で、先輩と話し合いをして、同じ考えを持っていて嬉しかった、いろいろな意見が出て自分の考えが深まった、などの感想があげられました。





6 教科 ～教え合い活動～

いつもの2年生の英語の授業に、3年生が3人、リトルティーチャーとして入りました。2年生は部活などで知っている先輩が多らしく、クラスのあちこちで笑顔が生まれます。まずは、あいさつ。そして、音読。事前に準備してくれていた3年生がお手本を披露すると「発音、すごい!」と2年生から感嘆の声が漏れます。1年間の差は生徒達にはとても大きく感じられるようです。プリント学習では、3年生が2年生からの質問に答えたり、手が止まっている生徒に声をかけたりしています。一般的な文法の説明以外にも、過去の自分のテストでの失敗談や、つまずきやすい所を細かく説明しています。聞いている2年生は、聞くときの態度や目がとても良いように見受けられました。

授業に参加した3年生は英語がそんなに得意ではないと言っていました、そのことがかえって、1年下の後輩が陥りやすい間違いなどに寄り添えていたように思います。3年生は、「教えることの難しさを感じながらも、説明して納得してもらったときの安心感や嬉しさがあった」と事後アンケートに答えていました。



7 合唱コンクール ～歌練習～

合唱コンクールの郷中。本番までの練習の中で下級生は3年生のクラスへ訪れ、上級生の歌の練習の仕方や、意気込み、発声の仕方などを実際に見て学びます。3年生にとっては、見られる緊張感と最上級生としてしっかりやらなくてはという責任感を感じる良い機会なのです。また、3年生から誉められたり具体的なアドバイスを貰ったりする1, 2年生は、その後の練習の様子が見違えて良くなっていきます。このような活動を通して、後輩が「最後の合唱コンクール頑張ってください!」というような3年生を応援するような気持ちを、さらに育てることができました。

さらに、今年度から新たに、合唱コンクールでも運動会と同じような縦割りの発表ができるかと考えました。そこで生まれたのが郷中ボディーパーカッションです。これは、運動会で使った応援団のリズムを、実行委員(生徒)がアレンジしたものです。これを入れたことで、学校としての一体感を感じることができました。また、1学年の全員合唱前に演技したことで、1年生にとってはコンクール直前の緊張がほぐれる良い機会になったのです。



8 給食 ～食育～

新生徒会役員になった生徒たちから『郷中で給食を』との声が上がりました。小学校では縦割り給食はよくあったそうです。合唱コンクールの練習期間中、でさらに一体感を出すために実施することにしました。アレルギー除去食対応の生徒は、教室移動はしないことにして事故を予防しました。給食当番は使用クラスの生徒が行います。当日は担任や副担任も教室に入り、一緒に給食を食べることにしました。中学校では初めての試みということもあり、会話が少ない班もあったが、それぞれに気を遣う姿が見られました。給食郷中の後、生徒に話を聞くと、「部活の後輩と一緒にの班になったが、2人だけで話をしてもし方がないので、部活の話題は避けることにしました。」「運動会で一緒に盛り上がった先輩たちと一緒に食べられて楽しかった。」などの感想が聞けました。



第四章 天沼郷中の課題と今後

1 天沼郷中の課題

まず、郷中をどの時期に、どんな形態で行うかの年間計画の策定が必要です。思いつきではなく、目標を持った郷中をタイムリーに効果的に実施する。次に、詮議のスキル化です。ただやみくもに異年齢集団を小グループで形成しても話し合いが盛り上がることはありません。上下関係のみならず、関係性のない人間相手には抵抗感が強く、常に「誰だ、こいつ」になってしまうからです。



計画的にエンカウンターを導入するとともに、話し合いのスキルの確立が急務です。このスキルは班討議のリーダーとなる3年生全員に必要となります。

例えば、司会者のスキルとして「それでは1年生から発言してください」「全員発言します」などのシナリオの作成、グループ形態を同性だけで形成したり、全体をサークル状にしたりして話しやすい場を醸成するなどです。

そこで、3年生だけのトレーニング場面も必要になってきます。内容はエンカウンターですが、それを進行するスキルとして「ピア・ヘルピング」のカリキュラムを学んでいくことが考えられます。

生徒たちが天沼中学校の伝統として、天沼郷中活動を誇りに思えるよう、常に新たな郷中活動を模索すること。異学年綱引き、異学年給食などアイディアにアンテナを広く張っていくことにします。

2 天沼郷中 今後の展望

中学校において異学年交流が部活動以外で行われている場面は、決して多くありませんでした。運動会の応援パフォーマンスが、上級生を中心とした異学年集団で行われるくらいで、学年の枠が強い指導者が意識的に異学年交流を行うことはなかったからです。

天沼中学校では、文化的行事の異学年交流の場として全校百人一首大会が企画されたのは8年前でした。

一枚の畳に、各学年が2人ずつ集まり、競技を行います。各学年の百人一首の精鋭が集い、しのぎをけずる畳もあります。



また、本校の特色である名文暗唱（言霊百選）では、校長に認定された言霊名人の3年生が1年生の暗唱を検定するシステムもあります。

合唱コンクール練習で、1年生は3年生の練習を見てその歌声に圧倒されます。同様に、「上級生はすごい」「3年生になったらあんな風になりたい」というあこがれを持つ機会を、教育活動の中にどれだけ設定できるか。まず、中学校3年間にせず、小中連携で7歳から15歳までシームレスな異学年交流ができる場の設定を創造する。例えば、中学生が小学生に読み聞かせをしたり、英語を教えたり。奇をてらわず、教員も負担感なく、日常的な場でそれが創造できるシステムを構築できるとちょっとわくわくします。

おわりに

あらためて、天沼郷中のねらいをまとめます。ねらいは二つです。異年齢集団による活動場面を増やすことにより、多様な関わりから相互交流が促進され、アクティブラーニング式の授業場面をさまざまに用意できるということが一つです。特別活動（学校行事・生徒会活動）。道徳を中心に、総合的な学習の時間・放課後などあらゆる場面を活用します。その諸活動が、最終的に教科学習で小集団で討論する学習の土台になることを目指します。教員の力量差に関わらず、生徒たちに小集団で、主体的に、対話的に、深く学ぶスキルを身に付けさせるのです。

もう一つは、異年齢集団に属することにより、人間として成長する際のモデルをもつこと、またモデルになることを意識して自主性、自律性を高めることです。後輩の前で「格好良い先輩」の姿を見せ続けることにより、上級生たちはそれが素の自分になるように成長をしていきます。

さらには、学校内に強い所属意識を持つ集団が二つあることにより、どちらか一つの集団の人間関係で行き詰っても、即不登校やいじめによる集団不適應に陥らないことです。

これらを目指した天沼郷中を、本校の特色ある教育活動として推進していくにあたって、オマージュの基になった「薩摩の郷中教育」、「会津の什の掟」をさらに研究したいと思っています。教育の不易流行を考えると、東京の一極集中ではなく、地方の伝統的な教育に温故知新として学ぶ必要があると考えます。

かの地の学校が、郷中教育や什の掟を取り立てて意識せずに、当たり前のように教育活動の根本に生かしているのなら、それを是非学びたい。現在の鹿児島市の中学校、会津若松市の中学校と交流しながら、お互いの古きをたずね、新しきを知り、日本の中学校教育の柱を打ち立てることができないものかと願っております。

そして地方の伝統的な教育に学んだことを踏まえ、最新の教育の理論・スキルを加味し、天沼郷中を真に温故知新の教育方法にします。そのために、教育カウンセリングの方法である「ピア・ヘルピング」を導入し、中学校の小集団活動に生かせるような実践研究を継続していきます。

天沼郷中ハンドブック

平成 2 8 年 3 月 1 日 第二版

平成 2 9 年 3 月 1 日 第三版

発行 杉並区立天沼中学校
校長 藤川 章

編集委員 藤原哲也 南部孝矩 河合健太郎

明石晴奈 川原龍介